

心理臨床における多重関係を考える

—— 地方のありふれた心理士の日常から ——

本林 友梨

多重関係を避けるという選択

—— 出産をめぐる私の経験から ——

私は今、居住地域からやや離れた場所にある県内の病院にいる。子どもの付き添い入院だ。幸い、命に関係するような類のものではなく、短期間の予定だ（そんな時になぜこれを書いているのかということだが、言うまでもなくいつもの“ギリギリまで先送り病”が発症してしまったからである）。実はここの病院、数年前に子どもを出産した病院である。なので、その時のことを思い出さずにはいられない。そして、実はその時の経験にも多重関係に関するエピソードがある。

私の業務の一つに緩和ケアチームでの活動がある。必要な場合は緩和ケアチームで介入している患者さんと面談をするなどのかかわりを持つ。妊娠が分かり、出産場所を考えなければならなくなった時（妊娠が分かってすぐに出産場所を決定しなければならぬことに驚いた！）、婦人科系の病を持つ人とお会いしていた。私の地域（医療圏域）は、出産できる場所は自身の病院だけであるので、普通であれば自身の職場で出産

することとなる。私もその一人になる予定であった（職場での出産に抵抗はあったが致し方ない）。しかし、職場の産婦人科病棟はその名の通り産婦人科にかかる入院患者を対象とするので、出産のために入院する人も、病気のために入院する人も同じ病棟に入院し、隣の部屋同士にもなる場合もある。それを考えると、私は自身の病院で出産する選択を、どうしてもすることができなかった。お会いしている患者さんは、消えていくかもしれない自身の命と向き合い、様々なことを考え感じながら過ごされている。一方で、私はその隣で、新しい命を生む。同じ場にいるのに、一言では説明しがたいこのような違いを理解し、受け止め、その場で過ごしていくということが、人としても心理臨床家としても若輩者の私は到底できないと感じた。こういう経緯があり、居住地域から少し離れた、今いる病院で出産することを選択した（私の出した決断を家族は反対することはなかったが、決断に至った事情への理解も得られた感覚はなかった）。出産に関する全てのことが未知である私に

として、自宅から最も近い病院ではない病院で出産することを決断するにはかなりの勇気が必要だった。「何かあったら？」と最悪のことを考えることもあった。「母になる人間としてこの選択はダメなのではないか」とも強く思った。けれど私は出産に関するいろいろな責任を引き受け、多重関係状況を避ける選択をした。

多重関係を「どう扱うか」から 「どう生きるか」へ

プライベートの「私」は、心理臨床家である「私」からの影響を強く受けてきた。自身のリサーチクエスト(以下、RQ)は日々の実践や生活から出発したものである。しかし、それは最初から現在のものではなく、実践が重なっていくうちに、また自身の生活の変化を経験していくうちに変化してきた。

初期では、心理臨床での多重関係そのものをどう扱っていくことができるのかという問いであった。主な関心は、一言でいうと、「どのような多重関係が許容範囲内(クライアントやセラピーそのものに与える影響が小さいと考えられるもの)で、どのような多重関係が許容範囲外(心理臨床全体に害を与えると考えられるもの)なのか」というもので、多重関係状況を評価することを願った。今振り返ると、このように考えていたことが安直であったと恥ずかしく思うが、当時の私は何がなんでも避けるべき場合/避けられなくても致し方ないときの場合を知ること、自分の多重関係にまみれた心理臨床実践に明確な指針を示し、実践をクライアントにとって安心安全なものにし、心理臨床家としての自分自身の安寧を手に入れたかったのだと思う。しかし、実践や日々の生活を営みながら研究を始めることで、問いを、日々の実践からの視点と学問的視点との間を行き来させる必要性に迫られ、いつしか避けるかどうかの問題ではないのではないかと感じるようになった。それが現在のRQに繋がった。現在のRQは「小規模コミュニティにおいて心理臨床と生活を営む心理臨床家は、人や共同体との関わりの中でどのように生きているのか」である。

ところが、このように立ち上がったRQに対し、別の疑問を持つようになった。RQは、心理臨床の多重関係と私なりに真摯に向き合う時を重ねて立ち上がったものではあるが、本当に研究に値する問いといえるものであるのか、ということである。研究を進め、様々な経験(失敗)をすればするほど気になるようになった。

そんな時に、Auto-TEMを用いて第一筆者自身のキャリア意思決定のプロセスを記述・分析した研究を知った(Tsuchimoto & Sato, 2024)。この研究では、まずライフラインチャートの作成からはじめ、様々な議論を行いながらAuto-TEMを作成し、キャリア意思決定のプロセスについて理論的な精緻化と詳細な記述を行っている。その結果、キャリア意思決定は個人的であると同時に集合的な文化的プロセスであることが示された。また、オートエスノグラフィーの視点から個人的文化と集合的文化の相互関連や共鳴を捉えることで、両者が形成されていくダイナミクスを明らかにできることが示唆されている。

このオートエスノグラフィーやAuto-TEMの視点をリサーチクエストの立

ち上げにも援用できないかと考える。私の RQ は自身の経験から始まったものではあるが、その経験は決して私一人の内側で起こったものではないと考えている。オートエスノグラフィーや Auto-TEM の視点を援用して RQ 形成の過程を記述することで、その RQ がどのような個人的・社会文化的経験の中から立ち上がり、どのような過程を経て研究上の問いとして形づくられてきたのかを振り返ることができる。これを通して、個人的経験から生じた RQ の研究上の意味や価値を考えることができるのではないか。

私の RQ はどこから来たのか？

では、私の RQ はどのような経験や関係の中で立ち上がってきたのだろうか。そこで、まずこれまでの経験を振り返るためにライフラインチャートを作成してみた。すると、現在の RQ を持つに至るまでの過程について、自分が理解していたものとは違うところが見えてきた（自分の思い込みの怖さを再確認した）。

まず、初期の RQ である多重関係の扱いについての問いは、確かに自身の生活や臨床実践の中で経験した困難から立ち上がったものであった。多重関係が生じることで日々の臨床実践に難しさを感じたり、心理臨床家としての劣等感を抱いたりする経験が重なっていた。

また、心理臨床家であることが、自身の生活に大きな影響を及ぼすことを実感する出来事もあった。しかし、その経験がそのまま「研究したい」という思いに繋がったわけではなかった。初期の RQ を立てた当時の

私は、多重関係をめぐる困難に疲れ、職場での不安も重なり、いつかは臨床の現場から離れたいという思いを持っていた。その際には学歴というものがあるほうがよいのではないかと考え、いつか大学院に戻りたいと考えるようになっていた。そんな折、学部時代から指導いただいている恩師に相談する機会があり、すぐさまの大学院受験を勧められた。子もまだ小さく、かなり躊躇したが、恩師から「忙しいと言ってやらない人は、一生やらない」という旨の言葉をいただき、勢いで受験を決意した。そこで、研究テーマを立ち上げる必要に迫られ、日頃から困っていた心理臨床における多重関係に取り組むことにした。つまり、振り返ってみると、私は「多重関係を研究したいから大学院に進学した」のではなかった。自分の人生やキャリアについて考える中で、大学院で学ぶという選択肢が生まれ、その選択をしたことで「何を研究するのか」という新たな問いが生じ、そこで初めて多重関係が研究テーマとして立ち上がったのである。

そして大学院に入り、実際に研究を進めていく中で、問いはさらに変化していった。当初は既に記述したように、多重関係の扱い方を知りたかった。しかし、多重関係は不可避であるということを、私自身の経験からだけでなく、学問的見解や他の心理臨床家のお話からも認めるようになった。また同時期に、夫から、生活の中で多重関係を避ける私の姿勢（例：子の保育園の保護者と深く関わることは避ける姿勢。本来なら友達になって、子ども同士も遊ばせることができるのに、という意見。）に対し、「子どもの権利を奪っている」という言葉をもらった出来事も生じた（この言葉は、その後幾度と

なく私の頭に浮かぶことになった)。このようなことも重なり、多重関係の扱いそのものよりも、「私」と同じように多重関係が不可避な環境で心理臨床を行っている心理臨床家は、一体どういうふうに生きているのか？ということを知りたくなった。

このようにライフラインチャートを作成してみると、私の RQ は、単純に「私が経験したこと」から直接立ち上がったものではないことが分かってきた。経験そのものは個人的なものであっても、その経験が何を意味するのか、何を問題として捉えるのか、何を研究するのかは、生活する地域、臨床現場での実践、他者との関係、キャリアの選択、大学院での学びなど様々な関係の中で変化していた。

個人的経験から立ち上がる RQ を 「研究する」ということ

このようにして立ち上がってきた RQ は「研究に値する問い」とはいえるのだろうか？ライフラインチャートを作成することで、私自身の経験だけではなく、その経験がどのような人や環境、社会文化的なものとの関係の中で形成され、研究上の問いへと変化してきたのかについては、ある程度振り返ることができた。少なくとも、私の RQ は、私個人の内側から突然生じたものではなく、様々な関係の中で形作られてきたものであることが見えてきた。しかし、RQ がどのように形成されてきたのかを記述できることと、その RQ が研究として価値を持つことは、当然ながら同義ではない。今回の作業だけでは、この RQ が研究上どのような意味や価値を持つのかについては、十分考えることはできない。今後は、ここで参照

した Tsuchimoto & Sato (2024) の Auto-TEM の考え方を手がかりに、RQ 形成の過程をさらに捉え直してみたい。RQ がどのように社会文化的な文脈と結びつき、研究上の問いとして形作られてきたのかを検討することで、個人的経験から立ち上がった RQ を「研究する」ということについて、何を考えることができるのかを探ってみたい。

Tsuchimoto, T., & Sato, T. (2024). Career decision-making as dynamic semiosis: Autoethnographic trajectory equifinality modeling. *Culture & Psychology*, 30(1), 48–69.